

### 第3回 万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けた ビジョン有識者ワーキンググループ 議事概要（メモ）

- 日時 : 令和元年8月26日（月）10時～12時
- 場所 : 大阪府庁本館3階 特別会議室（大）
- 出席者 : \* 敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。

#### <委員>

- 垣内 俊哉（株式会社ミライロ 代表取締役社長）
- 嘉名 光市（大阪市立大学大学院工学研究科 教授）
- 川竹 絢子（WAKAZO 執行代表）
- 田中 里沙（事業構想大学院大学 学長）
- 野村 将揮（Aillis Inc. 執行役員 Chief Creative Officer、  
World Economic Forum（ダボス会議）Global Shaper）
- 橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構 特別教授、  
大阪府立大学 観光産業戦略研究所長）
- 森下 竜一（大阪大学大学院医学系研究科 寄附講座教授）
- 薬王 俊成（WAKAZO 執行代表）

- 事務局から資料4に基づき検討資料を説明。その後、各委員間での意見交換を実施。

#### 《意見交換》

##### ○橋爪委員（座長）

5 ページのところをまず見てください。従来、この前出していたいただいたキーワード等を概念として整理しています。ご意見あればお願いします。

6 ページのところ「今後の議論の進め方」が書かれておりますが、この6 ページに関しましても、このような考え方でいいのかということで、ご意見いただければと思います。

また「軸」となる考え方という表現をしていますが、2050 年をイメージする中で、キーワードとして、ここにある言葉を柱として考えて行きたいというのが事務局案です。

このあたりを中心にご意見いただければと思います。

特に前回、申し上げましたが 2050 年のビジョンですので、現在、使われている概念や各都市や各地域の施策ではなく、今後 25 年で変わっていくであろうということを含めて、ご意見いただければと。

今つかわれている言葉から、我々は、次の概念を創っていかなければいけない。地域と共生や、ソーシャルインクルージョンといった概念も、次のフェーズに入った時に、このような段階になるであろうと予測いただけるとありがたい。

あと、もう一つは、大阪府人口 600 万ぐらい、関西は 1,000 万都市圏ですが、日本の人口が 6,000 万とか 8,000 万になるとして、この 1,000 万の都市圏を想定して、「持続可能な大都市圏とはどういうものなのか」ということを考えた上で、何か新しいキーワードなり、新しい概念というものがあればと思います。

ビジョンですので、現状から考えるのではなくて、かくあるべきだという理想を語っていただければいいと思いますので、ぜひ、引き続きご意見をお願いします。

本日から田中委員が参加されていますので、今、申し上げたような点に関係なく、2050 年の社会や国家や都市や暮らしというのは、どういうふうになっているのか、ないしは、どうなればよいのかということをもまず自由にご意見いただければと思います。お願いします。

#### ○田中委員

ありがとうございます。初回は資料の提出のみで失礼いたしました。その後、二回の会合でこんなにたくさんのキーワードが出て来ているところが素晴らしいなと思いましたし、ビジョンに向けた夢が膨らむ印象です。

本日の WG に向けて色々考えてきた中で、切り口はたくさんありますが、まずは新しい技術や AI をどう見極めて活かしていくかを整理したいと思います。2050 年に向けて、AI で今ある仕事の半分がなくなると言われますが、では、同時に存在していない半分の仕事はこれから生み出される必要があります。万博に向けた文脈の中で、新しい仕事・職種が、どんどん生み出されるんだという方向が見えて、新しい仕事をつくろうよ、というふうな機運が出ると良いと思います。

大阪発の新しい仕事が生み出されて、世界共通の仕事になれば、そこにスキル教育の必要性も生まれます。今ある、大阪の匠の人たち、おもてなしの精神、エンタメの精神や日常を楽しむ工夫が継承されることも期待し、「人への投資」が明確にしていけたらと思います。

キーワードとしては、例えば「ユニークネス」。イギリスはユーモアやジョークが、イギリス風としてくくられ、象徴されますが、大阪のおもしろさって、どのように表現すればよいでしょう。

大阪の面白さ、楽しさの特徴を整理してみると、何事でもおもしろがって見る視点なのかなと感じます。現在は、自分ファースト的な世の中ですが、大阪では自分とは意見が合わないという人に対しても、自分とは違うけど、「しゃあないわ」という視点や、「私はこう思う。あの人は知らんけど」という見解がでる。おもしろがる視点には大阪ならではの魅力があって、それこそクリエイティビティーの高さだと感じます。「軸」については、軸の先に将来像があって、そこに向けた道筋がどんどん作られて行くことかと想像しますが、将来像の「軸」となる考え方のところにあらためて注目したいです。これまでもたくさんピックアップしてもらっていますが、大阪にしかない、大阪ならではの経営資源を、丁寧に発掘し、整理していてもいいのかなと思っています。

ます。まずはよろしく申し上げます。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。では、後は1時間半ぐらいありますが、フリーディスカッションをと思います。ご意見ある方はお願いします。

○森下委員

8 ページのところなんですけど、これ前回から「Well-being」と言っているので、「Well-being」の意味は全然いいと思うんですけども、言葉が陳腐だなと。皆が言ってる話なので、何か別の言葉を考えた方がいいんじゃないかと思う。ちょっと 2050 年に「Well-being」というのが何かピンと来ないなというので、内容はこれとしてもいいんですけども、何かもう少し未来的なと言うのはおかしいが、何かいい名称がないのかというのが一つです。

それから、オープンイノベーション。心のバリアフリーでも出てましたが、オープンという言葉はどっかあってもいいのかと。やはり、大阪の特徴というのは非常に色々な意味でオープンだと、開かれていると言ってもいいと思うので、何かそういうのをもう少し盛り込めるのがあったらいいのかという気がします。

それから、人材育成は非常に大事だと思います。野村さんはずっと言っていますけども、やはり一つは教育だと思う。アジアの人たちを大阪に集めて来る、関西に集めて来る。その時に一番ネックなのは、やはり 9 月。むこうは 9 月が開校で、日本は 4 月というところで、半年間ぐらいどうしても学生が入れないと。東大が一時チャレンジしましたがけれども、結局やはり挫折して、依然として半年間ぐらはずれたままなんです。この半年間を上手くエドテックを使って繋ぐことで、例えば 9 月に入るんだけど、9 月から 4 月の間はオンラインを繋いで教育をして、4 月以降にならそれが集まるといったような新しい仕組みの大学院なり、教育システムというのをつくって行って、アジア圏の人たちが関西に来れるような、特に若い人たちが大学に入れるような仕組みというのをつくっていくのがいいんじゃないかと。その意味で、これから非常にフィンテック、ヘルステックと並んでエドテックというのは大きな分野なので、大阪でそういうものをリードするようなかたちを、大阪は公立大がありますから、そこを中心にやはりやっていくというのが一ついいんじゃないかという気がします。

今、ミネルバ大学は、オンラインを繋いで教育システムをベースにやって。事業構想大学院なんか傾向ちょっと近いと思うんです。もうハーバードよりもミネルバ大学の方が上だと言われいて。そういう意味では非常に教育システムというのが日本は遅れているので、ここに関して、もう少し大阪として切り込んでいくことが、2050 年という観念でいけば、やはり人を惹きつける魅力だとか、やはり来なければいけないというのが、もう時代遅れになってきているので。IR・VR それらも含めて、万博のそれらが中心になるとは思いますが、大阪の社会的な、教育とか、あるいは健康もそうだが、

インフラの中に何か盛り込むような仕組みというのが出来ると、非常に 2050 年は明るいかなという気がします。

キーワードとしてももう少し広げた方がいいかなというのは思っています。以上です。

○野村委員

今の森下先生のお話、本当におっしゃる通りだと思います。このワーキンググループでは、意外に、アジアの人材を集めるハブになろうといった議論がなされてこなかったもので、主題の一つにしてもいいのかなと。2050 年ということで、ヒト・モノ・情報、何もかも共有のされ方がまるで変わっていることを前提しつつです。

ミネルバ大学は、ご存知かも知れませんが、たしか半年とか数ヶ月スパンで過ごす場所が変わっていくんですね。ソウルは3ヶ月ぐらい、4年生の前半だったかの生活場所になるのですが、日本は他都市と比較された上で落ちてしまった。これは物価の高さが大きかったようなのですが、大阪ならそれはクリアしやすいですし、前々回のワーキンググループでも議論があったように、インクルーシブネスも高い。

そこで、物理的に大阪に住む意味合いがどこにあるかを考えた際、おそらく偶然性や予測不可能性があるといった点が肝要かと思います。それこそ田中さんがおっしゃっていたような「おもしろいやんけ」みたいな気質も設計されて打ち出されていけばいいんじゃないかなと。

○森下委員

ミネルバ大学は規制が厳しく日本は出来なかった。

○野村委員

ああ、そうなんですか。

○森下委員

教育というか、大学の規制がきつくて。

○野村委員

なるほど、なるほど。

○森下委員

だからそこもちょっと変えないといけない。逆に言うと特区でというのもひとつだと。

韓国とシンガポール。日本だけ落ちたというのは象徴的。

○野村委員

特区指定も比較的やりやすいのではないかなと思います。半年のインターンプログラムや短期のスクールプログラムを組むところから始められるかと。本当に、これから数年以内に始めるぐらいのトーンで行くべきです。

また、田中さんのお話も全くおっしゃる通りだと思います。具体的な大阪らしさをもっと突き詰めた方が、議論が着地しやすいという印象を受けています。前回の龍安寺の話をはじめ、これまで拡散させ続けた僕が申し上げるのはあれなんですけれども。

このワーキンググループのスケジュール感を、もう一度、ざっくりでいいのでご共有いただけるとよいのではないかなと思います。たとえば、いつ頃にこんなものをアウトプットとして作りたい、といったことなど、12月締めなのか3月締めなのかが見えるだけでも、今後の流れを構成しやすくなると思うので。

#### ○事務局

スケジュールは、最初の時もちょっと申し上げたように、このビジョン全体を何とか今年度、年度末に完成版までもって行けるみたいなところなんです。ただ、このビジョンというのを簡単に言いましたら、将来像を描いて、そこからどういうことをやっていくかということに結び付けて行って、ビジョンのかたちにする。

先生方には、将来像の部分をイメージ化していただくという点で色々ご議論いただく。そのため、少なくとも12月にはイメージ図も含めて何点かのもの、恐らく一つのイメージ図で全部を表すことは出来ないと思われるので、大事なキーワード毎ぐらいのめざすべき都市像と言うか、それを描いていけたらなと思っています。

そうすると、今、事務局から提示しているように、一回、二回と、かなり幅広いご意見いただいたもののかたちに持って行きたいと思っています。そういう意味で押さえるべきところというのを、きちんと今回ぐらいで押さえて。次の9月、10月ぐらいで、いよいよどうい都市像かということ言葉を明らかにしていく。また、それを、次は図にしたらどうかというのを、業者の方にも描いていただいて、なんとか11月中ぐらいにそこまでいけて、12月にその時点での案というか、素案みたいなかたちで出せればと、簡単にいうと、それぐらいです。

ただ、みなさん、先生方の日程もかなり厳しい方々ですので、そう頻繁には会議も開けないので、出来る限り、9月、10月、11月で、月一回、二回、出来れば二回ぐらいで、無理でも一回ぐらいのペースでと思っている。そういう意味で今回は、その始まりのところの「軸」になる考え方を、ここらではっきりとしたいなと。

#### ○森下委員

大阪が都市として生き残るということを考えると、やはり拠点化しないといけないが、その中でやはり産業拠点として大阪は何を中心にするのか。それ以外にやはり教育の拠点として、やはりアジアの中で生きていかないと、人が入って来ないと思うし、そういう意味では、やはり大阪の強みというのはヘルスケアを拠点としたような教育

みたいな、アジア全体の医療に貢献出来るような教育拠点を大阪がつくるというのが一つだと思う。

その中で、さっき言ったエドテックみたいなものを入れていって、あとはAIです。前回は発言したけども。フィンテックはやはり東京中心なんで、ちょっと大阪がやるのはしんどいかなと思ってて、そういう意味では、せっかくのヘルスケアのデータを上手く使ったような教育拠点を大阪につくっていくというのが、一番持続的に外から人が来る、新しい人たちが入ってくる。

そのためには何をするかというのを、一つ考えたらいいと思う。結果的にはそれは産業拠点到繋がると思うので。産業がないと持続しないから、大阪として何を次に産業化するか。観光というのも一つのポイントだと思うのだが、観光とはあくまでも一過性だから、やっぱり人を惹き続けるような魅力をつくるには、もう少し教育というのを真面目に考えていった方がいいと思う。昔だと来なければならなかったが、今はオンラインで繋げるし、アジアは特にやはり非常に関西が便利だから、そこを惹きつけるようなやつを、やはり大阪構想大学には頑張ってもらって、一つつくっていくのがいいような気がします。大阪公立大をもう少し活用した方がいいと思う。僕は。

#### ○事務局

ちょうど、大阪公立大の府大・市大というのを一つにする構想がありまして。これから少し具体的な議論を進めていく。どんなキャンパスをつくるのかとか、データセンターをつくるのか、そんなことも含めて。

法人は統合されましたので、あとは、大学そのものを統合する具体的な議論をこれから進めていく。その段階です。

#### ○森下委員

アジアの人を惹きつけるようなことしないといけないと思う。さっきのミネルバ大学のアジア版なんかもあってもいいような気がする。

#### ○嘉名委員

少し、お話しをさせてもらおうと、まず、少し時間「軸」の考え方を入れたらどうか。2050年という話がありましたよね、橋爪先生からもありましたが。府の人口は大体、今800万で、2050年が600万ぐらい。2050年の推計だから、どこまで正確かというのは、なかなか難しいのだが、かなり減って行くということを考えると、これは日本全体がそうなのだが、やはりこの20年ぐらいの間に準備しておかないと、えらいことになるということは思っている。

何かこう、世の中がゆっくりゆっくり変わって行くみたいなイメージで思っていると、えらいことになる。本当に逆壺形の世の中に、いよいよなってくる時に、それま

でにどう備えるかみたいな考え方は、やはりいるのかなという気がします。

まだ、この20年ぐらいは、たぶんしばらく、経済的にも、日本のパイというのはそれなりにあるはずだし、労働力もそれなりにあるはずだから、その間に出来ること、将来に備えておきましょうと。特に我々の分野で言うと、インフラストラクチャーの部分はそう。急いでやっても20年30年かかるものばかりなので。それについては、やはり将来を予見しておいて、今から備える考え方をしておかないと。慌てて考えても5年10年で出来るはずがないものばかりなので。そこは少し時間「軸」を変えて考えるということが一つ。将来見据えて作るものは作る話と、それからやはり変化に合わせて柔軟に対応出来る、そういう側面と2枚看板でいくというのが、やはりいるというのが一つです。

それから、議論を聞いていると、リアル大阪とサイバー大阪があって、リアル大阪とサイバー大阪を足して新しい大阪を作ろうというイメージなのかなと思っているのですが、まず、そのリアル大阪をより良くしていくための話は、これから大阪で万博を含めて、色んなエリアで展開される、色んなプロジェクトとか、まちづくりみたいなものにいかに最先端を実装して行くかみたいなリアル大阪の話があるということ。

それから、もう一つはサイバー大阪で、サイバー大阪というのは、まさにボーダーレスで、あまり大阪府っていう県境と言うか、そういうものがあると考えずに、グローバルに考えていいんですね。そのグローバルなサイバー大阪とリアル大阪が結びつくことで、大阪自体がさらに活性化されるみたいなストーリーが描ければいいのかなということです。

それをどうするかですよね。今、森下先生がおっしゃったように、大学、教育で、そういう機能を実装して行くというのもそうだと思うし、それから、私、一回目で申し上げた話で言うと、例えばアクセラレータとか、アーバンデザインセンターとか、そういう言い方をしましたが、やはり何か推進するような主体みたいなもののかたちがちょっと見えて来るのかなという気はちょっとしています。今のところはそんな感じですよ。

#### ○野村委員

今のお話も本当におっしゃる通りだと思います。少し話が飛びますが、このワーキンググループでは、IRの議論をしていないのですね。僕はカジノには行かないのですが、IRの議論ではカジノの側面がプッシュされがちです。他方、言わずもがな、integratedという言葉の通り、保養もそうだし、治療もそうだし、アートもそうだし、教育までも内包した、大きな概念であると理解しています。

少し余談になりますが、マカオ大にはIRの専門課程があるらしく、この前、マカオ大の教授と話す機会があったのですが、たとえば、依存症にならないようなAIの設計とか、IDで家族と紐づけて、家族の権限で利用を制限するとかというのを設計し

ていると聞きました。

IRの是非は、僕からはこの瞬間は申し上げませんが、遠からず本格的に議論されることになるであろうと思います。富裕層を呼び込んで時間を過ごしてもらいたいところの設計は、入口も含めてきちんと議論しなければいけないという課題意識です。

もう一点、本ワーキンググループにおいて、芸術、アートの話もあまりできていないなど。アートの世界においても、今ほど先生がおっしゃったように、サイバー化、グローバル化していくのだと思います。その際にはもちろん、リアルサイトの意味合いもまた現前してくるはずで、おそらく瀬戸内を含む関西圏でアートを取り扱うかという議論になり、この土台の上で大阪の文化性とは何なのかという自己定義も必要になるでしょう。今の内にその大枠だけでもはめておかないと、これから議論が展開しにくいなと思いはしました。

#### ○橋爪委員（座長）

カジノのある都市は大学にその専門の学部がある。ディーラーに限らず、全ての分野においてマネジメントの専門家が必要になる。カジノ警備の専門家養成コースとかがある大学もあると聞いた。観光集客に関する研究拠点みたいなものが必要であろうと考えている。

デザインやアートも重要。今度の万博は、「未来社会をデザインする」とデザインをうたっている。アートとデザインは、また違うので、その辺りの将来的な方向性も含めてまた議論を。

#### ○薬王委員

時間軸という話が、嘉名さんから出たかなと思うのですが、まさにこの大阪らしさとかを考えた時に、やはり非常に有機の時間の中で考えるべきかなと思っています。大阪の歴史が、難波宮が出来て、大阪城が出来て、直近でいくと、例えば、大阪大学が民から作られて、それが官にボトムアップであげられたと、そういう大阪の、ここ100年200年ではなくて、もっと大きな流れでの大阪の歴史というものを踏まえた上で、「軸」というのを作っていくべきなのかなというところを思っています。

「軸」の中で「人が中心となる」というところがあるのだが、それは嘉名さんの話であったリアル大阪とサイバー大阪、この話が非常にクリティカルだなというふうに思っています。これから、実際に5Gが始まってくると、遅延が0.1秒とか、そういう感じになってくると、たぶん、本当にリアルとか、サイバーとも違いが、関係がなくなるような世界になってくるのだろうと考えています。

そうなってくると、昼と夜、いつ大阪に人が居てほしいのかというところは考えなければいけないかなと。つまり、実際に大阪に「住む」のか、大阪に世界からサイバーで「入ってくる」のか、こういうところも含めて人が「集まる」というのは一体どちらの意味の「集まる」なのかということも含めて議論して行くべきなのかという



ふうに思っている。

実際に、大阪に「住む」というところになって来ると、そこは本当に大阪の今までの歴史。例えば食文化や、野村さんの話であった偶然性、セレンディピティが生まれて、そこからアートが生まれると。そういうようなストーリーもあるかと思うので、そういうところも含めて、実際にリアル大阪・サイバー大阪、MRであったり、テクノロジーとの親和性をどう考えていくかということが「軸」の中で考えて行くべきなのかというふうに思っている。

#### ○川竹委員

大阪という土地を考えた時に、エリアによって文化というのが、かなり違うなというのが、私は名古屋出身で京都に今住んでいて、大阪に全く住んだことがないという側からすると、すごく思うことで。

教育の拠点であったり、産業の拠点というのが、このエリアに行けばすごく教育が発達しているとか、このエリアであれば産業が発達しているという、そういうエリアごとのブランディングを促進して行くと、例えばサンフランシスコ等がすごく分かりやすく、このエリアに行くと、LGBTの方が多くいらっちゃって、スタンフォードのまわりに行ったら教育が発達しているという、エリアごとのブランディングが得意なのが大阪だなというふうに思っている。

あと、一番最初の森下先生の「Well-being」がチープだという言葉に対して、「being」という言葉が私としては、古いのかなというふうに思ったりはしています。もう少し、例えばファンクショニングとか、動的なイメージの言葉というのが、これからは合っていくのかなという、その二点を聞いていて思いました。

#### ○垣内委員

8 ページの言葉選びが「軸」としては弱いんだろうなというところですか。どういうことかと言いますと、「いきいき活躍出来る都市」、「変化・進化」、「チャレンジ出来る都市」、「輝き選ばれる」。曖昧な動詞、修飾語であるために、今後、ビジョンを定めて行く上での「軸」にしてはこういった文中に使われている言葉が曖昧としているので結局、「軸」になりえないというような印象を受けます。あくまで「軸」であって、目標・ゴールではないと思いますから、具体的な数値等々は挙げづらいのはわかるのですが、言葉をもっと磨いていかないと「軸」ではないなという印象です。私が感じたのは以上です。

#### ○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。何らかの分野で、世界一位をめざすとか、世界第一級のものとするとか、アジアで最も優れたものとするなど、何かベンチマークを置く書き方もあると思います。

#### ○垣内委員

配布資料の中にある、例えば、大阪が今、世界 3 位であったり、あとは、例えば、都市総合力では今、28 位。また、他人を助けたか 142 位。こういった今の客観的状态に基づいて何をどう変えていくのかということをやはり明確にして行かないと、繰り返しになるが「軸」ではないなというところですよ。

綺麗ごとだけを並べているという印象しか今の段階では受けないので、ここからビジョンをつくるとなっても、ビジョンもぼやっとするだろうなという印象です。

#### ○田中委員

先程、教育という言葉が、みなさんからも出ていましたが、2 ページのところの「ひとづくり」というのは、どちらかと言うと未来人材の方に注目が注がれていますが、今いる人たちが、人生 100 年時代においてさらにいきいきとモチベーションを高めながら当事者意識を持って活躍できることも大切です。

リカレント教育が問われる時代に、大阪の人は面白がって猛勉強している姿というのはどうでしょうか。勉強の方向は色々あり、自分たちの幸せに向けて、健康に向けて学ぶ・研究するというふうな文脈を、2050 に向けて創出できると良いですし、たくさん出てこれば楽しいです。

#### ○橋爪委員（座長）

ほか、いかがでしょうか。

#### ○嘉名委員

なんとなく、今、「軸」の議論になったので、少し話をすると、今までとやはり、「軸」を変えましょうということだと思います。「軸」の概念自体が変わるということかも知れません。

僕、前回、「大阪府やめたら」みたいな話を、「脱」とか、「第二大阪府」みたいな話を少ししたと思うのですが、やはり役所がつくると、こういう空の上から状態を見るみたいな、つまり、「人が中心となり、集まり、繋がる」とか、それから「変化し続ける」とか。要するに、客観的にものを見て、その状態を表す言葉に普通しますよね。別に大阪府があかんというつもりは全然なくて、普通はこうなんですよね。

ところが、前回、橋爪先生が「大阪は一人称と二人称が曖昧や」という話をしてて、「自分」と言うと、それは「I」と「You」と同じ。あるいは「We」の意味合いも持つみたいな。「自分、おもしろいな」と言うと、「あなた、おもしろいな」と。そういう曖昧さが実はあって、すごくおもしろいなという話をしていたが。要は、その当事者がどう思うかという言葉に置き換えるとちょっとおもしろいのかなという気はしました。

例えば、「共感する」とか、「実感する」とか、「楽しいと思う」とか、要するにここに参加してる人たちがどういう気持ちになるかみたいなキーワードに全部置き換えて行くと、「軸」が変わってくる。そういう話はあってもいいかなと。そうではないと、でもこれ計画行政にするのだったら、結局、行政用語に置き換えるのかなとか、ぐるぐる回ってるが、少しでも、そういうことをめざしてるんだということがもう少しはっきり分かると、今までと少し考え方が違うんだということがわかりやすくなるのかなと思う。

#### ○橋爪委員（座長）

大阪の将来像だが、我々は日本における西日本の拠点、中核となることをめざしていることは忘れてはいけない。前も申し上げましたが、メガリージョンの西のコアとして我々はどんな地域となる覚悟があるのかを考えることが必要かと。

その次に「大阪らしさ」を深く考えることが必要。大阪のバックグラウンドには、北陸やら四国やらの人が多く集まって、多様な文化がここで混じり合って現状の大阪が生まれた。関西全体の文化やら、歴史やら、伝統がある。後背地は広域である。

例えば、万博の誘致の時のプレゼンでも「関西らしさ」というのを前に出して、「WIN-WIN-WIN」って書いた。これは近江商人の話。近江商人が大阪に来て示した価値観というのが大阪の特徴だと示した。要は、「大阪らしさ」と言うが、それは多様な地域から来た人たちが共につくり上げてきたものだという理解が、私は大前提になると思います。

私たちは、ベンチマークを考えないといけない。例えば、上海を想定したら、3,000万都市となる。面積では、関西ぐらいの広さが、上海市と同様になる。カリフォルニアで考えるとしたら、ベイエリア全体と比べる必要がある。

大阪では、大阪湾ベイエリア構想を策定したことがある。そのフレームの中に、夢洲や関西空を位置付けて来た経緯がある。広域の中における大阪の姿を描くとき、そのスケールは伸び縮みをする。西日本全体の「コア」、「核」、「中核」でもあるし、関西での中核でもあるし、大阪湾ベイエリアの核でもあるし、瀬戸内の東のハブである。そこにおける「中枢性とは何ぞや」ということを考えないといけない。サイバー、フィジカル双方における中枢性を語らなければいけない。

もう一点、申し上げると、その中枢性は時代と共に変わってきた。江戸時代には商業に特化して、ここで様々なものの価値が定まる都市として発展した。明治以降、工業化が始まり、東洋のマンチェスターと呼ばれるようになる。繊維や機械や造船や、戦前は日本における最大の自動車の製造所が大阪にあった。

大正、昭和初期になると、東洋のウォール街、東洋のニューヨークと呼ばれる拠点を北浜につくった。そこはものの価値が決まる都市であった。商業中心から工業へシフトし、戦後には、戦後大量生産の社会に向けて家電やいくつか新しい産業が柱となった。

大阪にあって、買っているベースは商業都市であり、多くの人が交流する場である。それに工業都市というのが加わってきたのが現状の大阪である。

大阪らしさを活かすという中で申し上げたいのは、大阪らしさが失われているという認識である。それは本社機能が出て行ったり、大学を郊外に出したり、本来持っていた中枢機能が弱まってきた。それをどう再強化するかということも含めて、大阪らしさをもう一度考えなければいけない。

エンタメの分野で言うと、江戸時代には明らかに演劇やエンタテインメントにおける日本の中心であった。明治には、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞など、新たなメディアが創業する場であった。絶えず新しい媒体が大阪で生まれてきたという経緯があるのだが、それが戦時体制からだが東京に拠点が移された。それに対して、我々は常に新しいコンテンツや、新しい文化やら、新しい会社やら、新しい産業振興を生み出さなければいけない。

どういう分野においてアクセラレータの機能を強化するのか、どういう分野を伸ばすべきか、どういう発想が必要かとか、このあたりのご意見あればお願いします。

#### ○森下委員

2050年にどうゆう大阪がというのが大事だと思いますけど、今までの大阪は東京に対抗して行って、できるだけ大きく。その今までの路線を延長していくのが、一つあります。

一方で、低成長社会に入って、少なくとも今まで程度の大阪を維持したいと。それもけっこう大変な話しなんだけど。現状維持的なものためには何をすればいいか。

もう一個は、もう、諦めてしまって。ユニークなまちになろうと。ある意味、成長をめざすのではなくて、大阪的な立ち位置というものを、日本だけだと意味がないと思いますので、アジア・世界のなかで、グローバルななかで、どうゆう位置をめざすのかと。

方向性によって、やるべきことが変わってくるので。どうゆうまちを2050年大阪にもちたいか。生きている人達がどうゆうふうにするのか、けっこう大事な気がします。

みんな、どうなりたいたいかなと思ひまして。今までの大阪は、やっぱり「キャッチアップ東京」だし、できるだけ東京から引き離されないようにしよと。二元論あるなかで、ユニークだけでも、あくまで日本での2位は維持しようというなかで生きていたと思うんですよ。で、これから先、日本の中で2位を維持してもあまり意味がないかもしれないなかで。どうゆうふう大阪が生きていくべきかっていうのが、本当は一番大事な気がする。答えはなかなか無いんですけど。ユニークな世界に生きるっていうのも一つありかなと思ひますけどね。

#### ○橋爪委員（座長）

戦前までは東京までの移動距離とか時間がすごくあって。全ての分野において東京・大阪で別の文学やら建築やらアートやらがあって、全て自立していた。中枢として2つあった。

それが戦後になって、情報も交通もいっぺんに良くなって、本社機能統合とかをして、全て東京にと、キャッチアップ型みたいになって。

ただ、現状でもセカンダリー、二番手の都市のあるべき姿、東京・大阪だけでなく世界中一緒で。やっぱり、ニューヨークに対して、ロスやサンフランシスコは違うよねとか。あとは、ロンドンに対して、バーミンガムやマンチェスターは違うよね、みたいに。異なる分野において、異なる価値を生むというようなツイン。あるいは、名古屋とか福岡で言うと、日本の中で4つの拠点があって、それぞれ違う分野で世界への競争力があるみたいなところ。私はメガリージョンの議論ではそういうところを意識していました。

#### ○森下委員

2050年は東京と60分ですよ。ベッドタウンになってるかも。

#### ○橋爪委員（座長）

ならないようにしないといけない。

#### ○田中委員

東京に比べてどうかと考えるのではなく、大阪の位置付けや存在価値は、全く新しい物差しで定義することがあってもいいのかなと思います。

地方創生に取り組み、地域にもいく中で「将来は東京だけが全く別の国」になるのではと言う人がいます。成功事例がありつつも、全般的には地域での暮らしに不安が高まっています。

そうなると、大阪・関西というのは、大変重要な役割を担うことにもなります。歴史をたどれば、例えば近江商人は、静岡や埼玉に出て行って、商品を販売し、酒蔵つくったりして、ものと精神をどんどん外に持っていき、広めたわけですよ。サイバーでどんどん出ていくというのが、これからの時代かもしれないし。だから、物差しを変えて、大阪の良さを全国に広める気概で取り組みたいです。

2つ目は、先ほどの「軸」の話で、形容詞を集めるより、柱を立てていくというイメージが私の中にあります。今回の万博のコンセプトには「いのち輝く未来」という素晴らしい包括的な視点が出されていて、この健康という入り口から、食も、メディアも、交通も、教育も、防災も、展開していく。健康・ヘルスケアと交通のあり方、防災との連携など、そこから整理した方がよいかもしれません。

#### ○野村委員

先程の垣内さんのお話に全面的に賛成です。聞いていて、この議論は2レイヤーに分かれていると思いました。

一つに、僕は存在論を齧っていた哲学徒で、今も勉強しているつもりなんですが、たとえば、「かけがえのなさ」という言葉、ちょっとクサイ響きがしませんでしょうか。臨床哲学では、これを存在論的理解と言うのですが、僕はこの言葉が自身の胸中にハマったんですね。語感や語気の強度が足りないと、一般論みたいな形で、誰もが賛同するクサイ綺麗ごとで終わってしまうというのはすごく感じるところです。神谷美恵子という、僕が敬愛する作家であり、精神科医がいるのですけれども、彼女が自伝で、「切れれば血が出るような言葉を書きたい」みたいなことを言っていて。そこまで言葉を研磨し切るプロセスは難しいとは思いますが、僕も役人だったので様々な事情もよくわかるのですが、そういったレベルのものをつくりに行くのかどうか。その場合は合意形成とかプロセスどうするのか、といった議論があるのだろうか。

この語気や語感の話とは別次元でもう一つ、将来の大阪をどうしていくのかという中身の話があります。これは議論すれば何かが出来上がってくるでしょうし、この場でも合意できると思います。あくまで一例ですが、僕は富山県出身なのですが、富山市が「AMAZING TOYAMA」というのを打ち出しています。意外性があるというか、知られていない魅力があるというメッセージングが明瞭で、これはこれでとても面白いわけですね。さて、大阪・関西万博を見据えたこのワーキンググループでは、2050年やその先の未来の人のあり方を議論していますので、この種のキャッチコピーがほしいわけでもないだろうと。そうすると前回のワーキンググループでも示唆しましたけれども、主体というか、誰がそれを語るのか、担うのかという話しに帰結するだろうとも思います。

#### ○橋爪委員（座長）

節目を想定すると、未来を描きやすい。Society5.0を想定したがゆえに、Society4.0からこう変わるであろうと予測が可能になる。ニーズなどから変化を語るができる。これはさまざまな分野に通じること。今までも分野ごとに、時代の転機となる節目があった。たとえば私の研究テーマでもあるんですが、エネルギーの転換によって都市は変化してきた。明治時代には、産業革命によって都市が発展した。大正から昭和初期にあつて、電気供給の増加によって都市は変わった。電灯や電車の普及、高層ビルができエレベーターが普及したことで、都市が立体化した。地下や空中の空間が使えるようになったということがブレイクスルーであった。エネルギーのブレイクスルーと都市空間の転換が、ほとんど同時期に起こった。

さまざまなブレイクスルーを、今後も経験していくことになる。その先にどんな2050年があるのかを考えないといけない。今の手掛かりは、万博の具体化で提案した「Society5.0実装都市」と「SDGs +beyond」。色んな社会実験をまち全体で実施する発想も重要。2025年に示された未来のアイデアやら技術やらは、大阪でまもなく実装

化される。

ベースとなる大きな時代の転換期が 2025 年にあると考えたい。今は少子高齢化が問題だと言っているけれども、それが当たり前になる。統合型リゾートも当然あるべき施設となり、新たな変化が始まる。すでにラスベガスの複合型リゾートはゲーミング中心ではなくて、ナイトクラブやスポーツコンベンションに重きをおいて展開している。わずか数年や十数年で、都市の概念は変わっていく。我々は、2025 年がどのような転機であるのかを考え、さらにその先のことをイメージしなければいけない。

○野村委員

2025 年とか 2050 年とかの大阪はこういう姿をめざすぜ、というのは、誰が決めるのでしょうか。

○橋爪委員（座長）

ここで議論するのは難しい話かと。

○野村委員

そうなのです。僕も行政経験者なので、よくわかります。

○事務局

今日もそうですが、意見をいただいて、万博をインパクトに大阪の将来を活かして、どういうことを描くのか。そういう意味では、「いのち輝く未来社会」という、なかなかちょっとこの概念自体も人によって確定している、カチッとしたことになっていない部分は、確かにあるのですけれども。そういう中で、今までのいろんな課題を生み出す、これは大阪だけではないんですが、いろんな課題が生み出される世界中の、日本のというのが、大阪は課題を経験するのも何でも先に経験して。それに苦しんで、いろんな答えを出して行って、それを世界に発信して行ってみたいリーダーシップでいけるのか、いろんな概念はたぶんあるんですね。

いのち輝くですから、先ほどの健康のヘルス、ケアとかのそういうところから、本当にいろんな心配事がなくなって、更にそのためにどういうことをしていったらいいのか。そういう意味では田中先生がおっしゃっていただいたように、健康というところから、いろんなことを見ていったら、結局、どういうことが必要で、どういうことをめざすのか。また、「Society5.0」というところから、「持続可能性」とか、そういうところから見ていったら、どういうカントリーが描けるのか。更には橋爪先生がおっしゃったように、いろんなムーブメント。どうつくって行って、世界の都市、どうなっていくのかということから描くとなると、どうなるのか。何かそういう複数のところから浮かべていかないと、なかなかその「これや。」というのが、ちょっと導かれないのかなと思う。

○野村委員

そうなのです。僕の質問の趣旨は、本当におっしゃる通りであります。

○事務局

ただね、何と言いますか、万博のテーマとかコンセプトということは、やはり、もちろん。「万博をやるから、こういう大阪をめざすんや。」というのが、やはり打ち出さないとイケないので。こういうところから、どう開くのやというのは、我々はやりたいところ。ただ、それをやるのに、どんなことをそこに加味していかなければいけないのか。これは機械的に国のやつを版で押したように整理するだけで、「これですわ。」ということであれば、何にもおもしろくないし、そんなのはあかん。そういう意味で、前回や前々回、今回もそうですけど、やはり人が中心になって、いろんなことを生み出す。今までの大阪の良さというところが、更に発展してと。

何か、変化しなくても発展さすことと、やはり変化し続けることによって生み出されるということと、多くの人が集まって色んなものを生み出せるとか、そういうことをやっていくとか。また、ユニークもそうですけれども、通常の行政が描くようなところに加味して行って、本当にこんな大阪というのをバーンと出していかないと、なかなかちょっと出ないかなというところなんです。そういう意味で今回、ちょっと資料を出させてもらいました。

○森下委員

万博のレガシーですよ。それをベースに議論を発展させた方がわかりやすいかも。IRも含めてね。IRとMICE、それをベースに大阪として2050年、どういうふうに動くのだというのが、一番本当はわかりやすい。行政的にもやりやすいのだろうとは思っただけけれども。

○事務局

事務的なことを申し上げますと、万博本体の計画というのは、いよいよこれから、いろんな検討が始まるので、実は、これは完成するのは来年なのです。来年、基本計画が出来上がるので、本来はそれがあって、そしたら、その周辺の開催地としての大阪というのをレガシーも含めて、どうしていくのかというのを議論していくというのが、一番、筋かもわかりませんが、ただ、そういうところよりも先にめざすべきところをまず描いて、むしろ、万博協会とかが描いている基本計画でレガシーとかありますが、そっちのほうに話を持って行って、何とかそうしようかと思っていますので、そういう意味では先にやってみた形になるのです。

○森下委員



漠然とした万博のレガシーとして、こういうものが欲しいとするものをベースに。向こうの計画に対して、レガシーとして何があれば大阪が伸びるかというのが大事な点など。

#### ○橋爪委員（座長）

万博の構想は、万博の会場及び、関連する事業に関わるものだが、それに即して開催都市である大阪がどうあるべきかということ、パラレルで考えなければいけない。万博のレガシーも会場の中だけでなく、大阪府下全体に展開することを考えるべき。もう一点は、万博誘致の時にテーマのフォーカスエリアという説明の枠組みをつくって、説明していった経緯がある。セービングライブ、エンパワーリングライブズ、コネクティングライブズという3類型で整理した。人の人生にたとえて、いくつかのキーワードを並べて、テーマをブレイクダウンしている。

「いのち輝く未来都市のデザイン」というテーマの英語版で示された「ライブズ」という概念をどう理解するのか。誰もが、全ての人を取り残されず、充足できるという一番の上位概念があるので、生命の複数形を示している。そこでは多文化共生やダイバーシティを越えて、もっと大きな概念を示した。それはフォーカスエリアを見てもらうと、わかりやすく説明されている。

一方で「いのち輝く未来社会」がどういうものかということ、大阪府としてもイメージし、語らなければいけない。協会の説明の仕方を参考にしながら、このビジョンの中でも上手く説明することが求められる。

もう一点、重要なことは、アジアの中での大阪という視点。今日いただいた意見にも、アジアの中におけるハブ、ないしは人材育成の場というのがあった。例えば、大学だけではなく、昔はデザインの分野という、ベネトンのスクールが世界中の優秀な人は憧れて行く学校であった。食だと食の社会人向けの大学院が各地にできている。最近、イタリアのスローフードの大学とか事例の調査をしているが、すでに創業したレストランのシェフが2年間とか経営を学びに行く大学院ができてきている。そのエリアならではの食の概念を示して、それをもとに世界を意識して研修をするという大学院、教育の場がある。大学とは限らなくても、世界有数の教育、研究機関があれば良い。

例えば、関西で言うと宝塚というのは、そういう仕組みをつくっているし、京都の祇園の仕組みもそうである。伝統的なものを維持するためには、従来の教育ではないけれども、その分野においてはトップを創る、世界の人から注目される人材教育の拠点が求められる。

だから、そういう何か、アジアの人達を集めるような、ある分野におけるトップを創るトップアップ型のシステムというものが必要である。大阪で評価されれば、世界的にも評価される場がないといけない。例えば、食に関して、シンガポール独自の憧れる食がなかったので、だいたいこの20年ぐらいで、食文化を構築した。フードフ

ェスティバルや、アジアのレストランのトップ、シェフの世界一を決める催事をやりながら、シンガポールが美食の都市であるということを訴えた。これまでなかった文化を、ゼロからつくりあげた。

要は、元々あるものを伸ばすだけではなくて、我々は伸ばすという意欲があれば、ゼロベースから伸ばせるはずなのです。伝統的な歴史とか大阪らしさという語りを踏まえながら、2050年のフェーズへの移行を想定しながら、新しい中枢性を創ることが求められる。

#### ○野村委員

垣内さんにも、ぜひ、ご意見をいただきたいのですが、「軸」というものを考えるときに、おそらく二つ意味があり得るのではないかと。すなわち、精神的支柱といった意味合いなのか、フレームワークといった意味合いなのかで。

フレームワークを意味するのであれば、このまま進めていってもいいと思います。他方、精神的支柱という意味であるならば、これは別の場なのかもしれませんが、専門家を集めてでも、ちゃんとパワーワードを創りあげべきだと思っています。もちろん、このワーキンググループでつくらないのでもいいと思います。

しかしながら、両者を混合してしまうと、議論が混乱してしまいます。

おそらく、手元の資料の8ページ中でパワーワードになり得るのは、「イノベーションの民主化」ぐらいかなと思います。しかしながら、これは今日日は通用するやもしれませんが、2050年という意味では、さらにその先の議論が必要だと思います。

#### ○森下委員

長く住み過ぎちゃったから、わからなくなってきたけど、若い人はどういう大阪だと住みたいのか。

#### ○川竹委員

私は大阪には全く住んでいないので、リアルな今の大学とかですと、やはり大阪は文化が強過ぎるといところが逆にありまして、外から入って来るにはですね。

#### ○橋爪委員（座長）

開かれていると自ら言っているが。

#### ○川竹委員

さっきおっしゃった橋爪先生の話もゼロベースで強めていくと、大阪らしさも押ししていくと。後者、大阪らしさは自然と残っていくのかなと思った時に、やはり大変なのが、その文化の中でゼロベースに繋げていくというのが、どこか突破口を狙うのが大事だと思うのですが。全ての分野でゼロベースにしていくのは、すごく難しくて。

私、名古屋ですから、名古屋コミュニティができてしまうのですね。逆にそれは狙い目で、外からの人が逆に元からある文化が強いというところで、コミュニティを作っていくのが、そこが突破口になって、ゼロベースに何かをめざしていけるところがあるのかなと思いますけれども。すごく斬新な知恵をだして。

#### ○薬王委員

僕は出身が和歌山なので、個人的な感覚としては、和歌山から大阪に行くという感じであり、大阪は、ある意味で憧れの対象になっているところが必ず、あるかなと思っています。

実際に和歌山にいてると、僕が中学生の時とか外国人も全然なくて、大阪に行くといろんな外国人がいる。その意味で、「カオスのまち」みたいな感じのイメージがあって、そのカオスが、僕としては心地良くて、結構ワクワクするというのが大阪に端的に思うところです。

そのところでいくと、実際に 2050 年とかを考えていくと、そもそも大阪に人がどれだけ集まるのかと考えると、大阪と世界とのボーダーは間違いなくなくなるのだろうと思うのです。たぶん、MR も当たり前の世界になって、大阪に住んでなくても大阪に常にいるみたいなことがきっとできる。世界、例えばニューヨークから大阪に出勤するというのがいたって普通になってくると思うので。

そうなってくると、大阪にいてるのが楽しいといった感覚・感情が重要になるのではないかなと考えています。大阪に抱くイメージが楽しさであったり、ワクワクであったり、極論では大阪が魔法都市のようなものになってくれると、大阪に人が集まってくるのかなと思うところです。そんな刺激的で夢のある大阪であれば、是非住みたいなと思います。

#### ○垣内委員

今の住みたい、住みたくないところで言うと、私は、5 年東京で生活していますが、5 年東京で生活して改めて思うのは、大阪が一番だったなということです。

何がそう思うのかというのは、これはあくまで主観なので、やはり調査をしなければいけないと思いますけれども、例えば、こちらの資料であったチャリティーエイド基金の調べで「他人を助けたか。」142 位というのは、先ほどありましたが、本当にこんな順位なのかと。実際は街中で手を差し伸べてもらう機会、声を掛けてもらう機会というのは、大阪は非常に多い。多様な方に対して、お節介とまで捉えられるくらい、やはり手を差し伸べている人が多い大阪を、しっかりとまず実態を把握して、それに伴ってどうしていくのかということを考えていかないと。

というのも先ほどお話があったフレームワークとしての「軸」と精神的な「軸」というのが、定めきれないのだろうなど。結局のところ、どこにどの課題があって、実際に数値的にどうなのかというのが、ボヤッとしているのでフレームワークになり得

ていない。また、大阪らしさというのを先取りの気質というところでは、一個、明文化できているものの、それ以外では大阪らしさを表現できていないので、「大阪らしさを活かし」と書いたところで、やはり「わからない」、「届かない」、「何だっけ、それ」というふうになってしまっていると思うので。

以前の第1回でお伝えしたように、バリアフリーの原点は1970年の大阪であるといったことも、やはり大阪人は知らない。そういった大阪らしさをまず1回、ちゃんと定義してあげないと、フレームワークにしても精神的な「軸」にしても定まらないのだろうなというところですよ。

#### ○田中委員

大阪では当たり前と思っていることが、実は素晴らしいということがいっぱいある。ということが今のお話しですね。

#### ○垣内委員

そうですね。これだけ白杖をつけて、視覚障害のある方が歩いているまちというのも大阪以外ないですから。点字ブロックも一番普及している。また、エレベーターに関しても設置率がこれだけ高い。こんなにいろんな人がいるのだなと思えるまちというのは、やはり大阪。

例えば、配布資料であった1位ウィーン、2位メルボルンというところと言うと、インフラという観点で、ウィーンも100、メルボルンも100となっている一方で、大阪は96.4。これ本当なのかなというデータもあるのです。例えば、ウィーンもメルボルンもシドニーも、私はそれぞれ足を運びましたが、バリアフリーが全然出来ていないですから。大阪の方がよっぽど出来ているじゃないかと。ちゃんと明確に調べたら、最も住みやすい街というのは、すでに大阪は1位なのではないかと。よって、外部の調査に依存するのではなくて、しっかりとまず実態調査をした上で、どこに課題があるのか。確かにジェンダーギャップみたいなところで言うと、遅れている、そうかもしれないといったところも、何となくでしか把握していないはずなので。こういったことをまず、きっちりと調べきった上で、課題を把握し、明らかにし、それを5個か10個に絞って、それをまずは変えていこうみたいなことを、段階的に時系列をしっかりと定めてやっていくべきではないかと思えます。

#### ○田中委員

これからの時代、繋がりというのが一つのキーワードになっていて、繋がりの中で何が大事になってくるかという、「間合い」の問題かなと思うのです。人との距離間もそうですし、大阪は企業と企業の人みんな仲いいのですよ。例えば私の業界分野では、メディアと企業と広告会社がみんな距離が近く、仲が良い。

心地良い関係がありつつ、あと一步のところでは踏み込まないとか、絶妙な距離間

を持てるのが大阪の魅力かもしれません。これはリアルでもサイバーでも求められる人間関係で、これこそが継続的な、持続可能な関係性を担保する、すごいツールになりえます。

今回、SDGs+Beyond もキーワードの中にありますが、SDGs は私も研究しつつ、全部は理解しきれていないところもあるのですが、国や行政のレベルでは、SDGs の資金を呼び込んで投資し、インパクトを出すことが先行している中で、一般の企業や組織の中で SDGs に取組むと、職員とか社員がものすごくやる気が出たり、採用に効果的な面も出ています。仕事を通して社会に貢献しようとか、自分自身のやる事が社会により良く繋がっていくという認識が出るということなので、今回、「軸」を作る、このやり方を SDGs 的、SDGs をプロセスとして使うと有効かと思います。

レガシーをつくらうとしてもなかなか難しいのですけれども、万博後に常識になっていくようなものが、レガシーであるのとらえ、将来のルールを自分達でつくっていくというふうなモチベーションになると、大阪府民の方々も自分は関係ないというのではなく、少し関心を持ち、やる気を出してくれるかなと思いますし、周りからもそういうことをやりたい人が集められそうです。

#### ○嘉名委員

先ほど川竹さんが言っていたと思うのですが、時間軸とか結構、大きな話をずっとやっているのですけれども、次回以降なのかどうかよくわかりませんが、少しエリア別で考えてみるというのもあるかなとは思っています。

というのは、万博会場があって、万博会場のレガシーをというような話がずっと出ているのだけれども、それが大阪府下に展開することを恐らく、たぶん、大阪府さんはめざされるということだと思ってしまうのです。わかりやすく言えば、阪大がある豊中・吹田とか、そういうところはライフサイエンスの拠点として、たぶん、出てくるのだと思うし、いろんなストーリーが出てくるのだと思うのだけれども。そういうものを満遍なく考えるというと、ちょっとおとなしいというか、役所っぽいのですけれども、プロットしてみた時に、その地域性みたいなものを活かして、どんな展開があり得るのかみたいなことは、見てもいいのかなと思ってしまうのです。その時に何かもう少し地域性に合わせて、ブレイクダウン出来るというかですかね、ヒントが逆に見えてくることがある。

それをパイロットプロジェクトみたいな感じで、実装と言いながら、それが 2025 年にはある程度形になっているとか、それがどんどん伸びていく展開とか、そんなのがあっていい。

#### ○橋爪委員（座長）

既存の計画と、ビジョンとの共生を図るか図らないのかがいっぽうである。どこに駅がくるか、まだ想定されていませんが、リニア新幹線の大阪への乗り入れによって、

メガリージョンが構成されるという視点も入れておくべきでしょう。

○野村委員

全然別の話ですが、大阪府はインバウンド観光客が大きく増えていると聞いております。統計上の数値は把握していないのですが、東京で入国して、京都へ行って、大阪から抜けていく。

他方で、僕のまわりの友人知人は、意外にもあまり大阪に観光に来ないのです。これはすごく大事な話で、住むといい場所なのかもわからないですけれども、大阪がどういった都市か言える人が、大阪の外には意外にいないのではないかという仮説。もちろん、おもしろい人はいるし、タコ焼きは美味しいし、という話はできるのですが、大阪の良さを理解してもらえているかという点、少し悩ましいです。この前提がズレた状態で議論すると、大きく実状と逸れてしまうだろうなあと。

○森下委員

データの言くと、大阪1,100万人のインバウンドの中で、東京との違いでは70%が白人、大阪は70%がアジア人。だから、必ずしも東京から入って大阪から帰ったではなくて、関西圏だけの観光も多いんですよ。確か、トップが中国で、その後が、台湾、ベトナム。最近ではベトナムが増えている。アジア圏全体では、大阪府内非常にファミリーであるのは間違いない。

○橋爪委員（座長）

釜山からフェリーに乗って、大阪のライブハウス巡りとかをする。現状は、若い層が遊びに来ている面がある。

○野村委員

ちなみに、大阪でその人たちは何をしていますか。

○橋爪委員（座長）

団体観光客が通過している状況がある。関空インの場合は、京都へ行って、富士山を見て、東京で買い物をする。関空アウトの場合は、逆ルート。どの空港から帰るかで、買い物をする場所が変わる。従来は、関空インが多かったけれども、プロモーションを行い、この何年かで関空アウトも定着した。

○橋爪委員（座長）

国内の観光客も、大阪は増えている。USJも全国区になった。インバウンドが増えていると話題になるので、大阪は国内観光客の集客も訴求できている。ただ、逆に京都とかは外国人観光客が増え過ぎて、国内の観光客は減少している。住民と観光客の

融和を考えるオーバーツーリズム対策も不可欠。要は持続可能な観光とは何ぞや、という議論が、世界中で起こっている。世界各地でインバウンドが爆発的に増えているなか、世界共通の課題への対策が求められている。

○森下委員

滞在期間が短いとかね。そこで、メディカルツーリズム。あと、つかうお金。東京圏ではお金をつかうが、関西圏ではお金をつかわない。

○橋爪委員（座長）

この間、解決してきた課題もある、例えば、嘉名さんと一緒に都心部の街づくりを長年やっているが、10年ほど前は空洞化して、問屋街が衰退した。コインパーキングだらけであった都心に、マンションやホテルが増えている。都市構造の転換を誘導することを長年、継続したうえで都心は再生しつつある。

従来の高度経済成長期における中心市街地は、業務地区に特化していた。それを複合的な魅力あるまちに変えようということを継続している。世界各都市で、複合的な都市機能を強化している。ハドソンヤードの再開発などが良い例だろう。東京は、ニューヨーク、パリ、ロンドンがベンチマークになる。東京が競争力を持たないと世界の中で日本が落ちるということを意識して、再開発を進める。

大阪は、どこをベンチマークにしているのか。どこの都市を比肩して、都市の再生をめざしているのか。従来の課題解決をすることによって、産業の空洞化を補わないといけない。インバウンド観光で補うということを誰もが言うのだけれども、それだけでは先がない。次の活力になるような産業振興の考え方を示さないといけない。この間、パネルベイとか言ってきたけれども、上手くいったとは言えない。

○森下委員

成長論的にね。昔の地区だと、大阪は基本的に東側ラインが強いのですよ。そこと中央ライン。弱いのは西側の沿岸。それで、万博をあそこに設定するという一つの動き。西成とか、かつて大阪では全然ダメな地区だったけど、全然、様変わりをしているから。伝統的な大阪の概念がけっこう、インバウンドのせいで変わってきているという事実がある。間違いなく、大阪人というのは、あそこの土地は上がらないと言っていたのが、上がりだしたから。そう意味からすると、外国人のインパクトはすごいがあるのは事実なのです。

○野村委員

なるほど。

○森下委員

僕らとは違った概念で、土地の魅力を感じるというか。これから本当に大阪、日本がインバウンドだけではなくて、外国人労働者を受け入れていくことになるのと、だいぶ大阪のまちというのが、従来のゾーニングとは違ったかたちになる可能性は高いと思って。僕らにとって、居心地が悪いのが、外国人にとっては逆に良かったりするから。

#### ○野村委員

なるほど。

#### ○森下委員

そうゆう意味では、難しいのは難しい。でも、すごく変わる可能性がある。だから、ちょっと今日はなかったけれど、外国人労働者をどう受け入れるか、2050年をどういうふうにするかというのを議論しなければいけないかもしれない。たぶん、大阪が一番多いかもしれない。下手したら、入ってくる割合でいえば。

#### ○嘉名委員

今も公営住宅では外国人の割合が高くなっている。実は、インターナショナルシティみたいになりつつあって。それが今、福祉の問題とか、別の切り口で議論されているとは思いますが。あまり多文化共生というような話とか、前向きな議論では、なかなかないとは思いますが。

#### ○橋爪委員（座長）

私は、世界の各都市でヒアリングをする時に、自分たちのまちの特色をいかに把握し、またどう定義するのかという質問をします。加えて、ベンチマークとして、ライバルとなる都市はどこかと聞きます。たとえば上海もメルボルンなどでは、本当に多くの方が我がまちの個性は国際都市であると、何の躊躇もなく答える。この点は重要だと思う。メルボルンの再開発地区にオープンした新しい図書館に行ったら、二十以上の言語対応になっていた。市役所の人は、我々の考え方はここに示されているということから語る。

これは語り方でもあるのだけれども、姿勢でもある。要は国際化して、いろんな国の人とともに暮らしているということが前提になる。労働者が国際化するだろうということを課題として考えるべき。それは解決すべき課題ではなくて、世界に開かれた国際都市にとって必然であると考えべきではないか。

要は 2050 年において、大阪の特徴が何ですかと聞かれた時に、アジアで最も素晴らしい開かれた国際都市であると、多くの方が言えるようになっているのかどうか。

#### ○川竹委員



やはり、その話で、大阪府の現場に行かれています方とお話をする機会があると、大阪府の職員の方は大阪の現状をリアルに見ていて、共同住宅の中の4割が海外の人だったときに、高齢者の方が外国人の方のマナーとの違いで、不安になって家を空けられない、外出できない、という生活にしわが出てきているという状況を何とかしようと。高齢化が進んでいく社会の中で、外国人の方が入って来た時に、すごくリアルな問題というのが、まさにこの大阪の中にはあって。そういう問題を一つ一つクリアしていくのが、グロースモデルだけで大阪をアピールしていただくだけでなく、何か、万博を通してクリア出来たら、新しい大阪の在り方、魅力というものができのかなというのがすごく思います。

○橋爪委員（座長）

万博のテーマそのもの。

○川竹委員

はい。

○田中委員

大阪で、この万博を機に仕入れた知見を地域にも還元していくとすると、アジアで最も素晴らしい国際都市の条件としては、外国人労働者のお子さん達の教育をどんどん素晴らしいものにしていくアプローチが考えられます。大阪や関西を好きになり、馴染んでどんどん活躍してもらうことが先進的に出来て、その教育を大阪発で地域各地に広めていく。万博を契機に、外国人のお子さんたちへの教育を充実させ、自治体につないでいく文脈もSDGsということであれば、際立つと思います。

○森下委員

言語の問題がね。何かと言語。2050年は全自動翻訳機ですよ。普通にたぶん、しゃべったら、そのまま聞こえる。そういう条件のもとで、どういうふうに共生を図っていくのか。言われるように教育は非常に大事で。日本の教育は、日本だけの教育で。基本、日本語がベースになっていて、グローバル化されていないから。初等教育をグローバル化しないとおそらくダメなのでしょう。高等教育は基本、グローバルだからいいのだけれど、幼稚園・小学校・中学校ぐらいは、しっかりとやはり、府と市でも考えないといけないようなのが来ると思うのです。

その中で住みやすくてということと、両方でできればベストなのだけれども。言われるように現状は、どちらかというアメリカでもみんなそうなのだけれども、そういう人が入ってくると、どんどん白人の人が消えていってみたい、スラム化してくるといのが。そこは止めないと、大阪も住みにくくなってしまふから、それはちょっと真剣に考えないといけないかなと。言語の壁がなくなると、マシになりそうな気がする

るのだけれど。

○嘉名委員

8ページの最後三つ目が、「選ばれる」というキーワードを使っている。「選ばれる」というキーワードは確かにアムステルダムとか、いくつかのまちは使っている。相対的に競争力があって、ここがいいなと選ぶということが大事だという話しはあるとは思っています。それはそれでいいかなと思うのですけれども、何となくですが、相対的優位に立って、自分の方に困り込むみたいなニュアンスがどうしてもあるかなという気がします。さっきからの議論だと、大阪らしさみたいなものが、世界中に溢れて、世界がもっとより良くなるみたいな話なのですよね。だから、もっと大阪が選ばれるというよりも、大阪が世界に広がるみたいな。世界征服ではないけれども。

○橋爪委員（座長）

大阪的な価値観が世界にと。

○嘉名委員

そう。そういうことをめざせば、おのずと大阪という都市をめざす、選ぶという人も出てくるぐらいのニュアンスの方がいいのかもしれない。

○野村委員

思いつきました。日本語のキャッチコピーは、「百億総大阪」。

○橋爪委員（座長）

90年代はグローバルシティという概念が拡がり、ファイナンシャルセンターを核とした都市が構築とされた。世界の主要な都市にそういう拠点ができた。一方で、新たなサービスを行う労働者が各国から集まるようになった。東京における問題意識は、世界的なグローバルシティの競争の中で、東京がいかに存在価値を示すのかということであった。

ついでクリエイティブシティという概念が普及する。ヨーロッパ型の創造都市に対して、アメリカのようにクリエイティブクラス、すなわちクリエイティブ人材が集める都市が発展するという議論があった。その次のフェーズで、住みやすい都市が注目される。ポートランドとかシアトルなどの成長モデルが注目された。

その次のフェーズを考えることが、今回の議題で大事なことになる。私は「共創(コ・クリエーション)」という万博で示された概念が重要になる。

ありきたりなシェアリングのイメージでなくて、多くの人とともに様々なイノベーションを果たし、多くの人と共に新しい価値を生み出すみたいな社会が重要。サイバー、フィジカルが並存するなかで、共創型の都市の理想を掲げることが重要。

8 ページのところで、「コ・クリエーション」に通じる概念が落ちている気がします。三つの柱のそれぞれに求められる。アクティブな暮らしをする上でも、共に暮らすという中で、価値観が共有される。イノベーションについてもオープンイノベーションという言葉から、次の概念にシフトしないとイケない。

私が考える大阪らしさの中には、「共創（コ・クリエーション）」に置き換えられて説明ができる概念、プロセスが含まれているように思う。大阪は「共創」の都市であることを強調するべきだと思う。

#### ○野村委員

そういう意味では、今日とても良かったのが、皆さんが大阪をお好きなことがよくわかったということです。

イメージをまとめていくにあたって、大阪の人が大阪いいよねといった議論ではなくて、その良さを知らない人、だけど、きっとわかってくれる人に、訴求できるようなワードなのか、イメージなのか、コンセプトなのかが必要じゃないですか。僕は定期的に大阪に来させてもらっているんで大阪のよさも一定程度感じているのですが。なので、垣内さんも田中さんもおっしゃっていましたが、大阪らしさから深掘っていくというのが、筋としては真っ当な気がします。

#### ○橋爪委員（座長）

大阪は多様。北摂、北河内、中河内、南河内に住んでる人でそれぞれ文化は異なる。都心も、船場や天満など多様。

#### ○川竹委員

やはり万博のことをやるようになって、いわゆる下町だったり、居酒屋とか行くようになると、これが本当の大阪なんだというのが、今まで梅田までしか出なかったのが、わかるようになって、そうするのがけっこう大きいなと思いました。

#### ○野村委員

これ、とても面白い話で、東京の人が東京を好きだと言っているのを、あまり聞かないのです。京都は観光地として好きな人は山ほどいる。他方で大阪の人は、大阪が好きじゃないですか。これ、本当にすごいと思うのです。すごくいい学びです。

#### ○橋爪委員（座長）

もう一点、東西軸の話も重要。これまでも何度も、ベイエリアに拠点を移す構想があった。戦後復興期の時も、港湾の方に都市機能を動かす話があった。当時は、西に新しいコアとなる新市街地を創り、既存の都心とツインとすることを考えた。その後も、ベイエリア・弁天町を副都心とする構想があった。バブルの時なども東西軸が議

論された。

今回も同様に、中心部と湾岸の二軸、二拠点を想定している。ただしこれまでは、中心部の課題を解決するべく、西に別の都市をつくる、あるいは新しい機能を入れようという発想であった。

ただ今回は、従来とは異なり、都心とベイエリアで連携して都市全体で社会実験を展開しようをと考えている。これまでは学術研究都市などで、郊外型のテイスティングフィールドをつくってきたけれども、今回は都心の再開発地区であるグランフロント大阪やうめきた2期など、都心にテイスティングフィールドをつくって、そこで社会実験を行い、それを夢洲に展開する。さらに夢洲の万博で発展させ、それを街全体に実装し、世界の最先端をめざすというもの。

社会実験を都心で展開する事案は、海外ではいくつもモデルがある。大阪では、1970年大阪万博の会場が先行事例であったと言うこともできるが、2025年大阪・関西万博に向けて、多様なテストが出来るという意義は大きい。

#### ○森下委員

世界的に見たら、ベイエリアを失敗している地区は存在しない。大阪以外は。サンフランシスコもそうだし、シドニーもそうだし、どこでも。

ベイエリアは基本的に発展する場所なので。なぜか大阪だけは、数回に渡るチャレンジにも関わらず、散々たる結果に終わっているということです。

今回、ベイエリアを開発するというのとは一番大きな課題になると思う。発展できる要素としては、大阪ではあそこが一番、ポテンシャルが高い。クルーズの問題もあるし。

#### ○橋爪委員（座長）

他の都市では、港湾機能を移すと、古い港湾が再開発の対象となる。大阪の場合、内港化が求められる。今回も最新の港湾機能と新しいエンターテインメントの拠点が、夢洲のなかで隣り合わせになってくるという問題は構造的な制約。

#### ○嘉名委員

コンパスで円を描くと、中心の円のところに来ようとして、湾岸部の一番中心部まで埋め立てしてしまっているの、そこに機能が全部集まってしまう。そういう状態になってしまっている。また、港湾機能の再配置とか、そういう話しをしてくれば、また大きく変わる。

#### ○橋爪委員（座長）

そろそろ時間になりました。最後、これだけは述べてきおきたいというのはありませんか。今日は、議論が広がって、自由にトークをしていただいています。事務局には、

上手くまとめていただきながら、要点を活かしていただければと思います。それでは進行をお返しします。

#### ○事務局

みなさま、ありがとうございました。一点だけ補足させていただきます。本日、ご意見をいただいた6ページの議論の進め方というところ。我々もまだ、議論中なのですが、これまで委員の皆さんから将来像についてご意見をいただき、前回、「健康」「持続可能」「国際都市」というキーワードを出させていただきました。ただ、委員のみならずからは、施策に関するものだけでなく、おもしろさ、挑戦といった大阪の都市としてのご意見もいただいておりますので、「健康」「持続可能」「国際都市」等の将来像のイメージ化の前段で、おもしろさ、挑戦といった大阪の将来像の軸となる考え方を整理しておく必要があるのかなと考えて、今回、6ページのフローをお示しました。

今日、いろいろと意見いただきましたが、「軸」という言い方について、もうちょっと丁寧に整理をさせていただく必要があるのかなと考えております。本日、「軸となる考え方」を整理するには具体的なデータも必要等の意見もいただきましたけれども、そのあたり、「軸」の部分で議論をさせていただくのか、それとも「方向性の具体化」の部分で議論をさせていただくのか、今日は後段の方が全然、資料をご用意が出来ていなかったもので、次回以降、全体像がわかる形で我々としても、今後、整理はしていないといけないかなと思いますので、また、ご意見をいただきながら、整理をしていきたいと思っております。

本日はどうもありがとうございました。最後に企画室副理事よりご挨拶をさせていただきます。

#### ○事務局

今日は、本当にありがとうございました。様々な、貴重なご意見をいただきました。今、説明したように、どういうかたちで進めていくのかということ。今日は、特に大阪らしさというか、我々住んでいて無意識に過ごしている中で、なかなかちょっとわからないことであっても、きちっと大阪のことで、よそにはないというのが、対外的にも示せればと。また、万博後のレガシーにも関わってくるとは思いますけれども、国際的にも言えるように、そういうことをきちっと発信できることというのは、少なくともやっていかないとはいけませんので、そうしたことも意識をしながら、議論の仕方もご用意させていただこうと思っております。

個別にいろいろご相談させていただくこともあるとは思いますが、ぜひ、引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。次回の日程の設定も含めまして、またメールでやり取りさせていただきたいと思ひますので、引き続きよろしくお願ひします。

(以上)